



教育・福祉・文化から 子どもの育ちを考える

山田 恵子
(福祉学科教員)

1. 研究のきっかけ

2021年4月に、コミュニティ福祉学部福祉学科の専任助教として着任した。それまでは、兼任講師として大学でいくつかの授業を担当しつつも、福祉現場および教育現場での実践をずっと積み重ねてきた。今回、活動の場を変えることにしたのは、大学教員の定年を考えると残り数年となった期間において、これから社会で活躍する若者たちに、何か伝えられるものがあるのではないかと考えたからであった。

子どもの出産を機に仕事を辞め家庭主婦となっていたが、子どもが中学生になるときに大学の二部で学び始めたのが40代を目前にした頃だった。大学で出会った福祉の科目は、人が生きることそのものの学びであり、自身の人生に重ねて考えながら熱心に取り組むことができたと思う。学部4年生で社会福祉士資格を取得し、卒業と同時に児童相談所の職員となった。

児童相談所での勤務はすでに十数年前になるが、当時でも児童虐待対応は大変な状況だった。児童相談所がかかわる相談は、児童虐待のみならず複雑で深刻なものも多く、筆者のそれまでの生活からは考えも及ばないような家庭状況がそこにはあった。子どもや家庭の困難な状況を目の当たりにして、「これって何?」「どうしてそうなる?」といった疑問への答えを見つけようと東洋大学大学院で社会福祉学を学ぶことにしたのは、児童相談所で勤務し始めて2年経った時だった。修士課程では、入所している子どもが現すさまざまな問題によって起こる「施設不調」により、入所施設の変更を余儀なくされる「措置変更」という児童相談所が持つ措置権の行使と、子どもの権利の関係について探求した。

児童相談所での勤務を5年終えたところで実践の場を学校に移し、スクールソーシャルワーカーとして活動することにした。先に述べたように、児童相談所がかかわる相談は困難度が高かったため、問題が複雑化するもう少し手前で、子

どもや家庭により近い地域において、そして、多くの子どもが在籍し、在籍するすべての子どもにかかわることができる学校でのソーシャルワークを選んだ。活動の場を福祉から教育に移したところで、福祉と教育の異なるところ、重なり合うところ、共通するところなどを見出すと共に、子どもや家庭の姿をより身近に見ることになった。

スクールソーシャルワーク実践を通して特に関心を持ったのは、家庭の生活要因により不登校となり学ぶことができない子どもの現状であった。「人が生きるとは?」「子どもをささえるとは?」などといった、実践の中から浮かび上がる問いへの答えを探求するため、早稲田大学大学院で教育学を学ぶことにしたのは、すでに50代に入ってからのことだった。博士課程進学以降は、教育・福祉・文化の面から子どもの育ちをトータルに考える立場から研究に従事してきた。

ここまで述べてきたように、筆者は現場と大学院を何度も行き来し、常に実践と理論を循環的に考えようとしてきた。実践現場においてかかわりあった子どもや保護者らが、ソーシャルワーカーとしての筆者を成長させてくれ、大学院や社会活動でお世話になった先生方や先輩たちには、筆者を研究者として鍛えて頂いた。

本稿では、最近の研究内容、山田(2019)(2020)に言及することで、「新任教職員の研究紹介」とさせていただければと思う。

2. 研究紹介

1) スクールソーシャルワークを通じた子どもの生存権と学習権保障の探求 (山田2019)

学校を拠点とする福祉実践であるスクールソーシャルワークでは、主に福祉と教育が重なる問題にかかわる。本研究は、児童虐待の一つに分類されるネグレクトと大きく重なる家庭の養育力の低さによって長期間不登校となっている子どもの生存権、学習権の保障にあたって、スクールソーシャルワークの実践が欠かせないこと、そしてスクールソーシャルワークはどうあるべきかを探求した。

研究方法は、スクールソーシャルワーク実践に根拠を置いた。実践の中には、子どもや保護者ら当事者とスクールソーシャルワーカーや周囲とのかかわりあいの中に生まれる、さまざまな感情や思い、多様な関係、当事者それぞれの生活と支援のいとなみといった、生身の人間同士の間で起こるものがある。この実践におけるミクロの部分に注目し、そのなかに実践と理論の結節点を見出し、当事者のニーズに沿ったミクロレベル実践の理論化を試みた。

本研究では、支援のいとなみをエピソード記述で記したスクールソーシャルワーカー大田なぎさ(2013 2014)の実践(日本子どもを守る会編『子どものしあわせ』に連載)を手掛かりに、スクールソーシャルワークの理論を検討した。大

田が記したエピソード記述を扱う上で、その根拠となる鯨岡峻（京都大学名誉教授）の間主観主義的観察理論と接面理論を取り上げ、客観主義とエヴィデンス主義とは異なる研究方法をとった。

また、差別構造の下、必然的に「養育困難家庭の不登校」を生じてきた典型的事例として同和問題を捉えた。こうした問題の解決を目指して歩んだ同和教育実践のあり方は、養育困難家庭で長期不登校となっている子どもの学習権保障への福祉実践および教育実践のあり方について、多くの示唆があると考えたことによる。

論文の構成は、以下の通りである。

1章「家庭訪問論」では、接触が難しい家庭の子どもや親と出会い関係をつむぐきっかけとなる「家庭訪問」を取り上げ、スクールソーシャルワークのアウトリーチ支援の意義と必要性を述べた。

2章「遊び・生活文化論」では、「家庭訪問」で会えるようにはなっても、無気力で毎日漂うように生きている子どもへの働きかけとして、子どもが主体性と活動の意欲を取り戻す可能性を持つ「遊び」を取り上げ、「遊び」をソーシャルワークに位置づける必要を述べた。

3章「ケアリング論Ⅰ」では、長い間学校から離れていた子どもを学校につなぐ上で求められる「教師のケアリング」を取り上げ、4章「ケアリング論Ⅱ」では、教師一人ひとりのケアリングが学校全体に広がる、ケアリングを土台とする「校内体制づくり」を取り上げた。

5章「ネットワーク論」では、学びは学校教育だけではなく子どもは生活全体から学びを得ているという視点から、子どもの生活の場であり「子どもの育ちをささえる地域につなぐ」課題について取り上げた。ここでは、必ずしも不登校の子どもの学校復帰を目的とするのではなく、子どもが安心できる場と人を見つけてつなげていくための方法について論じた。

6章「教育史の中に探る」では、生活綴方教育の教訓を取り上げた。スクールソーシャルワークは米国ではじまり日本で初めて実践した山下英三郎（日本社会事業大学名誉教授）も米国で学んだ。しかし、戦前における優れた教育実践のなかにスクールソーシャルワークの歴史的な水脈を感じる。福祉が確立されていない時代に、子どものしあわせを希求し生活問題を抱える目の前の子どもたちと向き合い格闘した教師らの姿から、スクールソーシャルワークの今後について述べ、さらに実践と理論の関係についても考えた。

そして、終章にて本研究のまとめを述べた。

2) 生活綴方教育実践における教育と福祉の探求 (山田2020)

本研究は、上記(1)の6章を引き継いだものであるとともに、大学院研究室メンバーらとの共同研究5年の成果物(増山編著2020)の一部である。戦前の宮城県の生活綴方教師鈴木道太の実践を取り上げ、スクールソーシャルワークの視点から、鈴木の実践が子どもの生活と教育を結びつける教育実践であったこと、学校教育という枠からはみ出しながら、教育によって子どもの幸福を追求するという福祉実践をしたこと、鈴木の実践の中にスクールソーシャルワークの水脈を見出せることを明らかにした。

研究方法は、歴史研究として、鈴木 of 論文や著作等、並びに、国分一太郎や村山俊太郎、留岡清男といった鈴木を取り巻く人物が著したもの、梶村光郎などの鈴木道太研究者の先行研究、生活綴方教育⁽¹⁾や北方性教育運動⁽²⁾に関する文献を探っていった。なお、この共同研究のなかで、鈴木 の出身地である宮城県白石市の図書館に「鈴木道太文庫」を探し当て、鈴木の自筆ノートや講演日記の他、400字詰め272枚におよぶ『裁かれた教室』と題された未発表原稿を発見している(詳しくは、増山2017)。

本研究では、生活綴方教育のあり方を通した学校教育のあり方についての教育論争である、後期生活教育論争⁽³⁾を取り上げた。鈴木ら北方の綴方教師は、封建制が色濃く残り、冷害大凶作に見舞われた子どもたちの厳しい生活の現実を前にして、生活綴方を表現指導だけに限定することはできなかった。教育の前に子どもたちの生活を何とかしなければならぬとして、部落の再生、青年団の指導などのために地域に入っていった。こうした学校教育から大きくはみ出した実践は、生活綴方教師らに身体的にも精神的にも過重な負担をかける現実を生むことになり、城戸幡太郎ら研究者から、学校教育の固有の価値についてどう考えるのかを問われたのである。この論争で浮かび上がった、学校教育からはみ出した部分の問題は生活問題であり、鈴木らが実践した学校教育からはみ出した教育は、福祉領域へのアプローチだったのである。戦後、鈴木は教師に戻らず、町役場の職員を経て宮城県中央児童相談所の児童福祉司になっていくが、それは子どもの育ちを生活から考える鈴木にとって必然であったと言える。

論文の構成は、以下の通りである。

1章「子どもの生活に迫る教育実践」では、鈴木の生活綴方教育実践は、子どもや親だけでなく広く村の暮らしをも見据えており、ケースワーク、グループワーク、コミュニティワークといったソーシャルワークの視点をもっていたことを述べた。

2章「後期生活教育論争における議論からみる教育と福祉」では、後期生活教育論争における議論から、学校教育からはみ出した生活問題と、学校教育の独自性、

教師としての固有の実践について考察した。

3章「鈴木道太の実践とスクールソーシャルワークの水脈」では、鈴木の実践は、教育と福祉をつなぐスクールソーシャルワークの水脈ともいえるものであると考え、鈴木の実践の中から、子どもの権利の視点といった、スクールソーシャルワークが大切にしている重要な理念や視点を整理した。

そして、4章「日本型スクールソーシャルワークの創造に向けて」では、スクールソーシャルワークの始まりは米国の訪問教師サービスであるとされているが、鈴木らの実践の中にも教育と生活の統合の視点を見ることができると、生活綴方教育実践は日本の教師たちが生み出し発展させた、日本の風土から生まれた独自の実践であることを明示した。そして、子どもの育ちをトータルに捉える視点を、この優れた教育遺産に学ぶ必要を述べた。

3. 今後の展望

ここまで最近の研究内容について紹介してきたが、筆者はスクールソーシャルワークをはじめとして教育福祉問題を研究領域としている。しかし、上述の研究(1)の1章では、スクールソーシャルワークの始まりとされている訪問教師活動が、子どもの文化生活を総合的に捉えようとする発想に結びつく、セツルメントのセッターによる家庭訪問活動や学校訪問活動と似ていることを述べた。また2章では、これまで主に福祉と教育で捉えられてきた児童虐待や長期不登校などの課題を、子どもの文化問題の中で取り上げる必要があることを述べた。筆者は、「教育福祉」領域とされる問題も、教育学と福祉学という二分野だけでなく文化学を含め、「教育福祉文化」として探求したいと考えている。

子ども支援を中心とするスクールソーシャルワークでは、教育学と社会福祉学だけではなく、子どもの成長と発達に影響を与える諸科学の研究が必要である。そうした諸科学のなかでも特に子どもの全体をおおっている生活文化に注目し、教育学と社会福祉学につながり研究として子どもの文化学の視点が重要であると考えている。

現在は、研究(2)を引き継ぎ、鈴木道太を手掛かりに教育における生活概念について探求しているところである。その後は、セツルメント研究を手掛かりとし、子どもの育ちに生活文化がどのように影響するのかを探求したいと考えている。

【注】

(1) 村山士郎(1988)「生活綴方教育」青木一他編『現代教育学辞典』労働旬報社473頁は、生活綴方教育は「子どもたちに生活のなかで見たこと、聞いたこと、感じたこと、考えたことをありのままに書く文章表現活動の指導をとおして、豊かな日本語の文章表現能力を育て、事実にもとづいた生活認識となかまとの連帯感を形成する教育。…日本の生活綴方運動は、書

くことをとおして子どもの生き方を確かなものにしていく教育改革運動でもある。その意義は、生活の新しい貧困化がすすみ、戦後民主教育のなしくずしの再編がすすめられようとしている今日、特に重要である」と述べている。

- (2) 海後宗臣監（1971）『日本近代教育史辞典』平凡社583頁によると、以下のように説明されている。「昭和四年頃から昭和十二年頃にかけて、東北地方でおこなわれた生活綴方を中心とする教育運動。東北各県で生活基盤に密着した綴方教育をすすめていた青年教師たちは、東北地方大凶作を契機として北日本国語教育連盟を結成、「教育・北日本」を発行して、子どもの生存権を守りぬく教育をめざしてたちあがった。現実には押し流されてしまうことなく、生きぬいていく「生活意欲」のさかんな子ども、現実を変革していく「生活知性」をもった子どもに育てなければならぬとし、公教育の現実に密着した地点でその改造運動をすすめた（抜粋）。」
- (3) 中内敏夫（1999）『中内敏夫著作集Ⅵ 学校改造論争の深層』藤原書店37頁によると、「生活教育論争とは、一九三〇年代の中期、形骸化してきた小学校教育、すなわち全国児童共通の義務制の普通教育をどう打開すべきかをめぐって、同時代の科学者、小学校教師、教育研究者などからなる学校改造運動の関係者のあいだでおこなわれた歴史的な論争である」。大きくは前期と後期に分けられ、前期生活教育論争は、1935年から1936年にわたって児童の村小学校生活教育研究会機関誌『生活学校』誌上で行われた、野村芳兵衛と小川実也との「生活の本質は労働か否か」についての論争をいう。後期生活教育論争は、1938年から1939年にかけて、主に戸塚簾編集『生活学校』および教育科学研究会機関誌『教育』誌上で展開された、生活綴方のあり方を通して学校教育のあり方が争点となったものをいう。

【文献】

- 大田なぎさ著・増山均解説（2015）『スクールソーシャルワークの現場から一子どもの貧困に立ち向かう』本の泉社。
- 増山均（2017）「鈴木道太研究序説—『鈴木道太文庫』の価値と鈴木道太研究の今日的意義」早稲田大学文学学術院教育学会『早稲田教育学研究』（8）：pp.5-49.
- 増山均編著（2020）『鈴木道太研究—教育・福祉・文化を架橋した先駆者』明誠書林。
- 増山均・齋藤史夫・山田恵子（2020）「鈴木道太の教育論と生活綴方論の展開—戦前期を中心に—」（増山編著2020）：pp.63-106.
- 山田恵子（2019）「スクールソーシャルワークの理論と実践—養育困難家庭の不登校児の学習権保障をめぐる—」（博士論文：早稲田大学）。
- 山田恵子（2020）「鈴木道太における教育と福祉—『はみ出した教育』と福祉へのアプローチ」（増山編著2020）：pp.107-123.